

主日礼拝説教「天の国は近い」

日本基督教団石神井教会 2017年1月22日

【旧約聖書日課】イザヤ書 8章23b節～9章3節

8^{23b}先に、ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが

後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた、異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。

9¹ 闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

2 あなたは深い喜びと、大きな楽しみをお与えになり、人々は御前に喜び祝った。

刈り入れの時を祝うように、戦利品を分け合って楽しむように。

3 彼らの負う軛、肩を打つ杖、虐げる者の鞭を

あなたはミディアンの日のように、折ってくださった。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 1章8～17節

8まず初めに、イエス・キリストを通して、あなたがた一同についてわたしの神に感謝します。あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているからです。9わたしは、御子の福音を宣べ伝えながら心から神に仕えています。その神が証ししてくださるのですが、わたしは、祈るときにはいつもあなたがたのことを思い起こし、10何とかしていつかは神の御心によってあなたがたのところへ行ける機会があるように、願っています。11あなたがたにぜひ会いたいのは、「霊」の賜物をいくらかでも分け与えて、力になりたいからです。12あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。13兄弟たち、ぜひ知ってもらいたい。ほかの異邦人のところと同じく、あなたがたのところでも何か実りを得たいと望んで、何回もそちらに行こうと企てながら、今日まで妨げられているのです。14わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。15それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです。

16わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。17福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。

【福音書日課】マタイによる福音書 4章12～17節

12イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。13そして、ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた。14それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。

15「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、

ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、

16 暗闇に住む民は大きな光を見、

死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

17そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

「悔い改めよ。天の国は近づいた」

世の中では海の向こうの超大国の新大統領就任に関するニュースで持ちきりのようです。しかし、それは必ずしも明るいばかりのニュースではないようです。結束を呼びかけるほどに深まる、分断の現実。それがわたしたち人間社会の姿なのだ、あらためて思わされた方も少なくないと思うのです。

大いに皮肉なことだと思いますが、ちょうどこのとき、1月18日から25日の期間ですが、世界中のキリスト教会は「キリスト教一致祈禱週間」と呼ばれるときを過ごしています。ご存知でない方もあるかもしれませんが、世界教会協議会(WCC)とローマ・カトリック教会が共同で呼びかける、世界的におこなわれている超教派の祈りのときです。1908年に米国聖公会の司祭が提唱して始めたのが最初だと言われていますから、今年はちょうど100年目です。日本でも多くの地域で先週から今週にかけて、諸教派教会合同の「一致祈禱会」が催されているはずですが、わたしたちの教会の立つ練馬では行われているのでしょうか。しかしながら、「一致祈禱会」が行われていないとしても、そこに参加していないとしても、わたしたちは、この年2017年を、キリスト教会として特別な祈りのうちに迎えていることを忘れてはならないと思います。

今年は、1517年にドイツの修道司祭 M・ルターが宗教改革運動を始めて500年の記念の年です。10月31日が、その記念日です。この記念日は、かつては、ローマ・カトリック教会とプロテスタント諸教会との分断の現実を如実にあらわす記念日でした。しかし、今や、この記念日は、カトリック教会にとっても、プロテスタント諸教会にとっても、全キリスト教会とキリスト者がキリストにあって一致へと招かれていることを確かめる記念日となっているのです。

500年前にルターが改革運動を始めるにあたって掲げた第一声は、「私たちの主であり師であるイエス・キリストが、悔い改めなさい、と言われたとき、彼は信じる者の全生涯が悔い改めであることをお望みになったのである」(九十五箇条の提題の第一項)というものでした。ルターは、もちろん、主イエスが宣教活動の初めから告げられていた「悔い改めよ。天の国は近づいた」という御言葉を知っていて、そのような第一声を選んだのです。

「悔い改めよ。天の国は近づいた」。この御言葉に従うように、わたしたちは、神の御前にささげる礼拝へと集められてきたとき、まず、詩編51編に導かれて罪の告白をいたします。罪の告白をして、悔い改めをしようとしているのです。毎週のことなので、皆さんの中には、目をつぶっていても自動的にその言葉が出てくる、という方もあることでしょう。けれども、わたしは、たとえ暗誦されているとしても、ぜひ目を大きく開けて、唱えていただきたいと思うのです。目を開いて、そこに広がる神の現実、主イエスが「天の国は近づいた」と告げられた、その現実を、はっきりと見る者となっていただきたいのです。礼拝に集い、神の御前に進み出る。そして心開いて罪の告白をする。悔い改める。そのとき、わたしたちは、目の前に「天の国」が近づいている現実を目の当たりにしている。そのことを、見逃さないでいただきたいのです。

主イエスは「ユダヤ」から「ガリラヤ」へ

「悔い改めよ。天の国は近づいた」。そう、主イエスは告げられて、宣教活動をお始めになられました。それが、今日、わたしたちの聞いている福音書の告げることです。この御言葉によって、わたしたちは、神の御前に進み出ることをお許しただいている、と言ってもよいでしょう。悔い改めに生きる者として教会に連ならされ、御前に礼拝をささげる者としていただき、ここで、天の国の現実に触れさせていただくようになったのです。ルターに「わたしたちキリスト者の全生涯が悔い改め」だと言われなくても、わたしたちは、日々悔い改めの祈りに生きていると言えるようになりたいと願う者でしょう。

けれども、それは容易なことではないと思います。皆さんは、日々の祈りの生活の中で、どれほどの悔い改めができていると、感じられているでしょうか。毎日の祈りは欠かさない、という方でも、その祈りの多くは、神への感謝と願いばかり、ということがないでしょうか。それに加えて、家族や親しい者のことを憶えてのとりなしの祈りがあれば、わたしたちの祈りは満足してしまっている、ということはないでしょうか。「自分は、日曜日には教会に行っているし、曲がりなりにも悔い改めはできている」と安心しきって、本気で悔い改めの祈りすることなど忘れてしまっている、ということはないでしょうか。「だから、日曜日の礼拝で、まず罪の告白をしているんだ」。それは大切なことです。けれども、もしも、あの詩編 51 編をただ自動的に出てくる言葉として唱えているだけだとしたら、そこで為されていることが、本当に悔い改めだと言えるでしょうか。

わたしは、何も、皆さんの悔い改めを疑っているわけではありません。むしろ、わたしは、皆さんに、こう問いたい。「皆さんは、悔い改めの大切さをよく知っていらっしゃる。けれども、だからこそ、その悔い改めの難しさを前にして、立ちすくんだり、避けて通ったり、何とかやり過ごそうとしてしまう、ということがあるのではないのでしょうか」と。

「悔い改めなさい。天の国は近づいた」。主イエスが、そう告げて宣教活動を始められたのよりも前に、実は、同じ言葉で洗礼者ヨハネが宣教活動をしていたことを、マタイ福音書は伝えています (3:2)。ヨハネも、人々に、「悔い改めなさい。天の国は近づいた」と告げて教えていたのです。ところが、ヨハネのもとに宗教熱心な人々、ファリサイ派やサドカイ派の人々が集まってきました。すると、ヨハネは、その人たちの罪や悪を指摘して、神の怒りを免れるために悔い改めよ、そうすれば赦してもらえるかもしれない、と迫ったのです。

そのようなヨハネのもとを訪れて洗礼をお受けになられた主イエスが、ヨハネと同じ言葉で宣教活動を始められたのは、当然だったかもしれませんが。けれども、決定的に違うことが、主イエスにはおありでした。ヨハネのようにユダヤ地方で活動することをせず、ガリラヤ地方に退いて活動されたのです。ユダヤ地方は、当時のユダヤ人にとっては、宗教的な地です。宗教熱心な人々は、そこを目指しました。しかし、そこではなく、そこを離れて、主イエスは、世俗の地、宗教におよそ熱心ではないような人々の住むガリラヤ地方に行かれたのです。

「ガリラヤ」から始まる

主イエスが行かれたガリラヤ地方は、もちろん、古い時代にはイスラエル王国の一部だったのです。南北王国時代には、北王国の領域でした。けれども、紀元前 8 世紀には、北方の帝国アッシリアに侵略されてしまったのです。それ以後、その地域は、イスラエルの人々の地というよりも、異邦の人々が大量に移住してきた地、混血が進み、社会、文化が多様化し、それゆえに、宗教的なことよりも世俗的なことが中心の地となっていたのです。

主イエスは、そのようなガリラヤ地方の町ナザレでお育ちになられたのです。そして、長じてそこから出てきて、洗礼者ヨハネの活動するユダヤ地方、あのエルサレムの都を中心とした宗教的な活動の盛んな地で、しばらく過ごされたのです。その主イエスが、ヨハネが捕らえられたのを機に、ユダヤからガリラヤへと移って行かれたのは、ただご自分の身の安全のため、ということではなかったでしょう。むしろ、主イエスは、意識的にガリラヤ地方をご自分の活動の中心としてお選びになられたのです。昔の預言者イザヤが、「**異邦人のガリラヤ**」と呼んだその地を、主イエスは、お選びになられたのです。

当時のユダヤ人の目から見て、およそ宗教的とは思えない地、中心的とは思えない辺境の地、何も期待できないような地、それどころか宗教的な者にとっては関心さえ寄せられない地。そこは、暗闇以外の何者でもない、宗教的な関心の強い者には思われていたのです。ところが、主イエスは、そこを目指された。その暗闇の中でこそ、神が大きな光の御業をお始めくださるということ、ご存知だったからでしょう。その、宗教的な命からは遠く離れているように見える「**死の陰の地**」にこそ、神が御業の光を射し込んでくださると、ご存知でいらしたからでしょう。

わたしたちは、主イエスが「近づいた」とおっしゃられる「天の国」を、どこに見出すのでしょうか。わたしたちの中の、もっとも宗教的なところで、見出すのでしょうか。わたしたちが敬虔な思いをもって、もっとも神に近づいていると感じているところで、「天の国」を見出すのでしょうか。

そうではありません。「天の国」は、「悔い改め」の中で見出すのです。「悔い改め」とは、「方向転換」することです。180 度、向きを変えることです。わたしたちの中の「ユダヤ」に向かって目を、「ガリラヤ」に向け直すことです。わたしたちが中心だと思っているところから、周辺の、わたしたちの思いの外にあるところへと、心を向けていくことです。わたしたちの期待するところではなく、期待したこともないところで、何かが起こることを知るようになることです。

主イエスは、ガリラヤからお始めにされました。ガリラヤから始まる神の御業の世界、神の光のもとへと、わたしたちをお招きくださっているのです。わたしたちもまた、今いる「ユダヤ」から、「ガリラヤ」へと退く。主イエスの立たれる「ガリラヤ」に従って行く。そこでこそ、主イエスは、わたしたちと出会ってくださるのです。わたしたちの「ガリラヤ」でこそ、わたしたちは、主に見出されるのです。そこでこそ、わたしたちは「天の国」を見る者とされるのです。